出土した遺物

今回の調査では多数の瓦が出土しています。大部分が焼成に失敗して捨てられたとみられる平瓦や丸瓦の破片で、軒丸瓦・軒平瓦・鬼板も複数含まれています。丸瓦には「下」の文字がヘラ書きされたもの（写真 4）が複数点確認されており、「下野」「下総」など瓦の生産を負担した関東地方の国名を表している可能性があります。また、凸面に蓮花文を列状に（5 列）施した平瓦（写真 5）は特徴的なもので、県内では初の出土例となります。

1：重弁蓮花文鬼板、 2：重弁蓮花文軒丸瓦、 3：二重弧文軒平瓦、 4：丸瓦ヘラ書き「下」、 5：陽出蓮花文平瓦

まとめ

今回の調査では指定地の東部を対象とし、窯 4 基、灰原 2 か所を面的に検出し、部分的な精査を行いました。その結果、西区で検出した窯の新旧関係が明らかになりました。また、窯の内部を精査した SR3 では、窯の構造・規模を確認しました。

今後、出土した瓦を分析し、ほかの窯跡群や多賀城から出土した瓦と比較検討していきます。

調査要項

所 在 地：宮城県大崎市古川小林字浦越地内
調査指導：多賀城跡調査研究委員会（委員長　佐藤　信）
調査主体：宮城県教育委員会（教育長　伊東昭代）
共　　催：大崎市教育委員会（教育長　熊野充利）
調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所
　　大崎市教育委員会文化財課
調 査 員：古田和誠・矢内雅之（宮城県）、早川文弥（大崎市）
調査期間：令和 4 年 5 月16日～ 8 月25日
調査面積：約260㎡

多賀城創建期の瓦窯

大吉山瓦窯跡

第 2 次発掘調査
成果概要資料

宮城県多賀城跡調査研究所

はじめに

宮城県多賀城跡調査研究所では、奈良・平安時代の陸奥国府・多賀城と関連の深い県内各地の遺跡の発掘調査を、昭和 49 年から計画的に実施しています。

多賀城は今からおよそ 1,300 年前の 8 世紀前半に創建されました。そのときに建物の屋根にふかれた瓦は、多賀城から直線距離で約 23 ～ 35km 離れた宮城県北部の窯で焼かれたものであることが分かっています（図 1）。これまでに日の出山窯跡群（色麻町）、木戸窯跡群（大崎市田尻）、下伊場野窯跡群（大崎市三本木・松山町）の発掘調査が行われ、これらのうち一部は国の史跡に指定されています。

大吉山瓦窯跡は江合川の左岸、標高 40 ～ 50 mの丘陵斜面に立地し、周辺には小寺遺跡・杉の下遺跡などの奈良時代の遺跡が多く分布しています（写真①）。昭和 47 年頃の農道工事の際に窯が発見され、出土した瓦が多賀城で使われていたものと同じであったことから、昭和 51 年に約 2,180㎡が国の史跡に指定されました。昨年度に実施した第 1 次調査では、史跡指定地内に細長い調査区（トレンチ）を複数設定し、8 基の窯と 3 か所の灰原を確認しています。

今年度は、指定地の東部に広い調査区を設定して窯および灰原を面的に検出し、窯同士の新旧関係を調べること、一部の窯の内部を調査し、窯の規模・構造・年代などを確認することを主な目的として、調査を行いました。

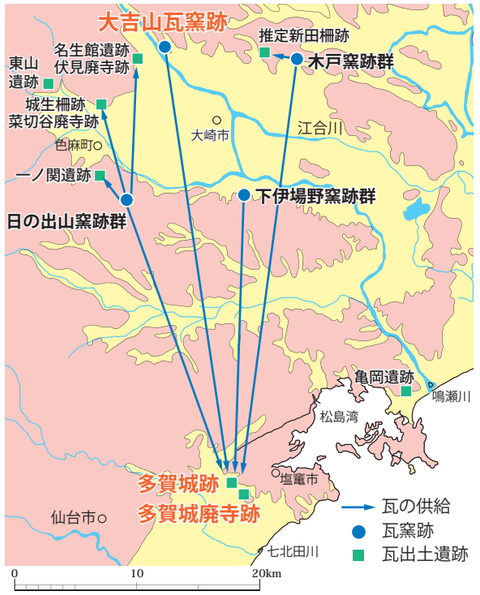

図 1　多賀城創建期の瓦生産遺跡と供給先

写真①　上空からみた大吉山瓦窯跡
（北側から，令和 3 年度撮影）

みつかった窯

発掘調査の結果、西区で窯３基（SR1 ～ 3）と灰原２か所（灰原 A・B)、東区で窯１基（SR8）を検出しました。このうち SR1 と SR2 は､昭和 47 年頃の農道工事で見つかった窯の一部とみられます。

窯の西側半分を掘り下げて精査した SR３は、斜面をトンネル状に掘り込んだ「地下式窖窯」（図２）で､天井が崩落した窯体から前庭部までを確認しました。窯の幅は約 1.5 m、焚口から奥壁までの長さは 8.3m あります。煙道は奥壁と焼成部右側壁に認められ、後者は地山を約 0.9m トンネル状に掘りぬいており、最終操業面に伴うものとみられます。前庭部から斜面下方に向かって幅約 0.5m の排水溝が掘られています。

SR1 ～ 3 の斜面下方には、窯から掻き出された炭や焼土､失敗作の瓦などが積もってできた「灰原」があり、瓦集中が４か所形成されています。

西区の窯の新旧関係は､SR １が SR ２より新しく、SR2・3 は同時に操業していた可能性があります。

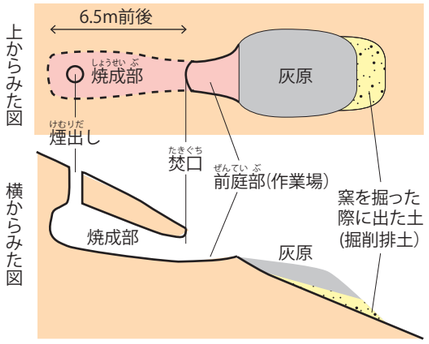

図２　窯の形態模式図

写真②　SR １～ SR3 窯跡（南東から）

写真③　SR ３窯跡（南から）

写真④　SR ８窯跡（北東から）

写真⑤　灰原 A でみつかった瓦集中①（南東から）

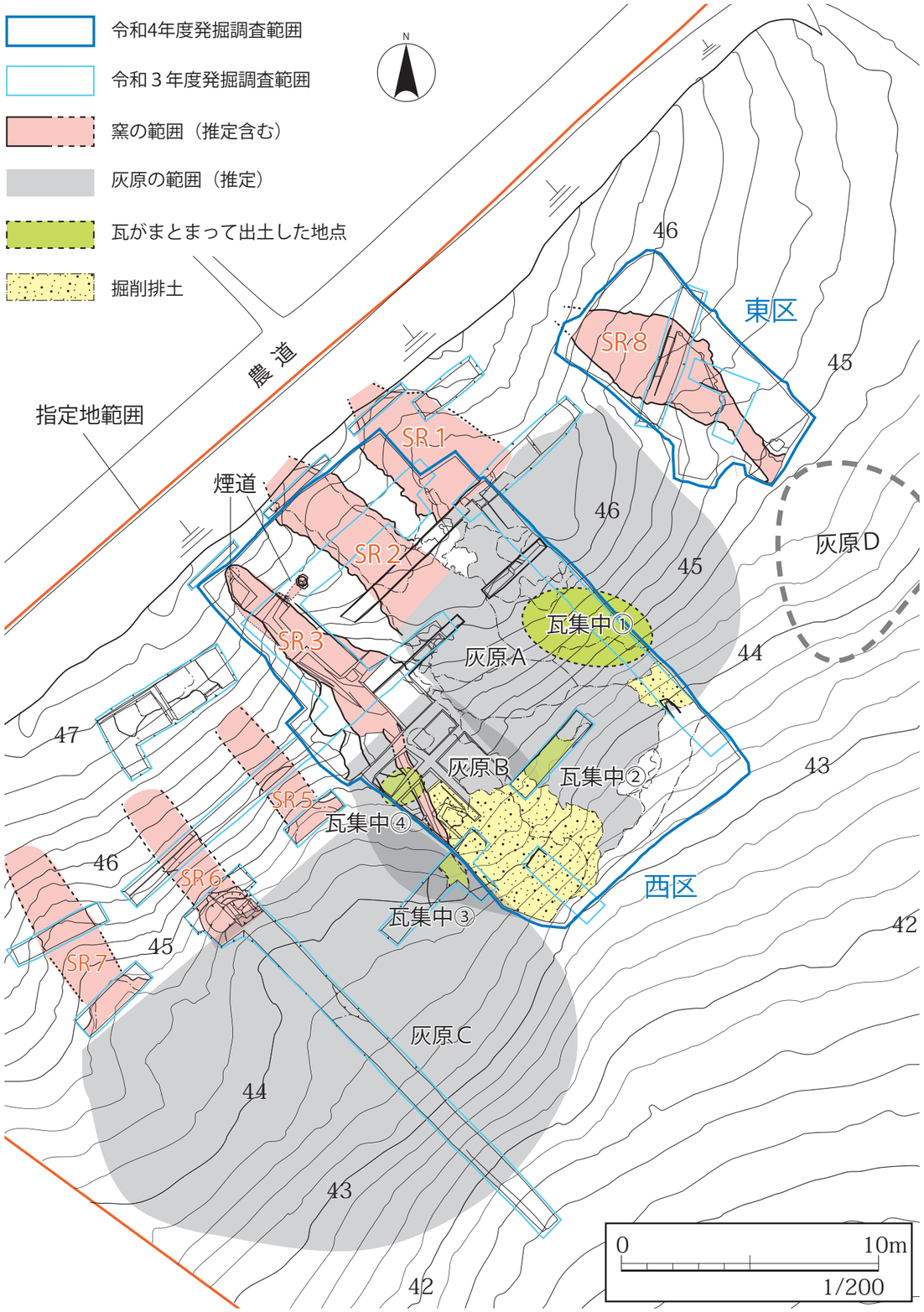

図３　大吉山瓦窯跡の調査状況